

古文文法 習熟度テスト⑥ 解答

名前

1 「なむ」の識別

(1) 「なむ」の識別に関して、識別対象になる4つの内容を答えなさい。(各1点×8)

- ① (他者への)願望 () の終助詞「なむ」
- ② 完了 () 助動詞「ぬ」の () 未然 () 形+ () 推量 () の助動詞「む」
- ③ ナ行変格活用 () 動詞の () 未然 () 形+ () 推量 () の助動詞
- ④ 強意 () の係助詞「なむ」

(2) 「なむ」の識別に関して、4つの識別対象の見分け方を説明した次の文章の空欄を埋めなさい。(各1点×13)

「なむ」を識別する際には、「なむ」の (①) を確認する。「なむ」の (①) が (②) 形であれば、(③) の終助詞「なむ」であると判断する。そして、(④) 形に接続する「なむ」は (⑤) 、(⑥) の助動詞「ぬ」に (⑦) の助動詞「む」が接続したものであると考える。また、(⑧) の助動詞「む」の上に (⑨) 、(⑩) といった (⑪) 動詞の (⑫) 形活用語尾が重なっているケースもある。最後に、これ以外の場合を (⑬) の係助詞「なむ」と見極める。

- | | | | | | | |
|---|--|--|---|---|---|--|
| $\left[\begin{array}{c} \text{上(接続)} \\ \text{推量} \end{array} \right] \begin{array}{c} 1 \\ 8 \end{array}$ | $\left[\begin{array}{c} \text{未然} \\ \text{死ぬ} \end{array} \right] \begin{array}{c} 2 \\ 9 \end{array}$ | $\left[\begin{array}{c} \text{(他者への)願望} \\ \text{(〓あつらえ)} \end{array} \right] \begin{array}{c} 3 \\ 10 \end{array}$ | $\left[\begin{array}{c} \text{連用} \\ \text{ナ行変格活用} \end{array} \right] \begin{array}{c} 4 \\ 11 \end{array}$ | $\left[\begin{array}{c} \text{完了} \\ \text{未然} \end{array} \right] \begin{array}{c} 5 \\ 12 \end{array}$ | $\left[\begin{array}{c} \text{強意} \\ \text{強意} \end{array} \right] \begin{array}{c} 6 \\ 13 \end{array}$ | $\left[\begin{array}{c} \text{推量} \\ \text{*5と6は逆でも可} \end{array} \right] \begin{array}{c} 7 \end{array}$ |
|---|--|--|---|---|---|--|

(3) 「なむ」の識別に関して説明した、次の文章の空欄を埋めなさい。(1点)

「なむ」が接続する活用語の未然形と連用形が同じ場合、「なむ」を識別するためには (文脈判断) を行うことが必要になる。

(4) 次の各文の傍線部 1 ～ 7 の種類を、願望の終助詞は A、強意 + 推量(意志・その他)は B、強意の係助詞は C、ナ変動詞の語尾 + 推量(意志)は D の記号で答えよ。また、4・5・7 を口語訳せよ。(記号各 2 点 × 7・訳各 3 点 × 3)

① その人、かたちよりは心¹なむ¹まさりたりける。

② もし賢女あらば、それもものうとくすさまじかり²なむ²。

③ 身をえうなきものになしはてて、ゆくりもなく、いさよふ月にさそはれ出で³なむ³とぞ思ひなりぬる。

④ かばかりになりては、飛び下るとも下り⁴なむ⁴。

これくらい低くなったら、飛び下りたって下りられるだろう。

⑤ 入らせ給はぬ先に雪降ら⁵なむ⁵。

お入りにならない前に雪が降ってほしい。(降ってくれたらいいのに)

⑥ 「かく思したる⁶なむ⁶、いと心憂き」。

⑦ 死なば一所で死⁷なむ⁷。

死ぬなら同じ所で死のう。

[D]

[C]

[A]

[B]

[B]

[B]

[C]

2 「ばや」の識別

(1) 「ばや」の識別に関して、識別対象になる2つの内容を答えなさい。(各1点×3)

① (自己願望) の終助詞「ばや」

② (接続) 助詞「ば」+ (係) 助詞「や」

(2) 「ばや」の識別に関して、2つの識別対象の見分け方を説明した次の文章の空欄を埋めなさい。(各1点×12)

「ばや」を識別する際には、まず「ばや」の(①)が判断基準になる。「ばや」が活用語の(②)形に(①)している場合、次に着目すべきなのは「ばや」の位置で、「ばや」が(③)にある場合は(④)の終助詞「ばや」と判断し、一方「ばや」が(⑤)にある場合には(⑥)助詞「ば」の(⑦)条件に(⑧)助詞「や」が接続しているものと考ええる。

(①) に関しては、「ばや」が活用語の(⑨)形に(①)している場合もあり、このような場合の「ばや」は(⑩)助詞「ば」の(⑪)条件に(⑫)助詞「や」が接続しているものと見分ける。

<u>接続</u>	1	<u>未然</u>	2	<u>文末</u>	3	<u>自己願望</u>	4	<u>文中</u>	5	<u>接続</u>	6
<u>仮定</u>	7	<u>係</u>	8	<u>已然</u>	9	<u>接続</u>	10	<u>確定</u>	11	<u>係</u>	12

3 「に」の識別

(1) 「に」の識別に関して、識別対象になる7つの内容を答えなさい。(各1点×14)

- ① () 形容動詞 () ナリ活用の () 連用 () 形の活用語尾
- ② () ナ行変格活用 () 動詞の () 死ぬ () 往ぬ(去ぬ) () の () 連用 () 形の活用語尾
- ③ () 完了 () の助動詞「ぬ」の () 連用 () 形
- ④ () 断定 () の助動詞「なり」の () 連用 () 形
- ⑤ () 格 () 助詞の「に」
- ⑥ () 接続 () 助詞の「に」
- ⑦ () 副 () 詞・ () 副助 () 詞の一部 ※⑤と⑥は逆でも可。

(2) 「に」の識別に関して説明した、次の文章の空欄を埋めなさい。(各1点×10)

- (1) 「() ① () ② () +に」は形容動詞と判断する。
- (2) 完了の助動詞「ぬ」は連用形で、「に+() ③ () , 「に+() ④ () , 「に+() ⑤ () 」の形で扱われることが多い。
- (3) 「体言+に」で、「である」と訳せる「に」が () ⑥ () の助動詞、訳せないのが () ⑦ () 助詞。
- (4) 「に+あり」や「にや」, 「にか」のような形で用いられる「に」は () ⑧ () の助動詞と判断できる。
- (5) 「に」が「連体形+に」の形で用いられる場合, 「連体形+に」が述部になる場合の「に」は () ⑨ () 助詞である。また, 「連体形+に」, 「」のような形で, 「に」が「ので」, 「ところ」などのように訳せる場合の「に」は () ⑩ () 助詞の「に」である。

- 1 () 様子
- 2 () 状態
- 3 () き
- 4 () けり
- 5 () たり
- 6 () 断定
- 7 () 格
- 8 () 断定
- 9 () 格
- 10 () 接続

(3) 次の各文の傍線部 1 ～ 5 の意味を、完了は A、断定は B の記号で答えよ。また、1・3・4 は口語訳せよ。(記号各 2 点 × 5・訳各 3 点 × 3)

① 慈悲の心なからんは、人倫に¹あらず。〔 B 〕

慈悲の心がないような者は、人間ではない。

② 藤原の古りにし里の秋萩は咲きて散りに²き君待ちかねて〔 A 〕〔 A 〕

③ 月の都の人にて、父母あり。〔 B 〕

月の都の人であって、父母もいる。

④ 女をば草むらの中に置きて、逃げに⁵けり。〔 A 〕

女を草むらの中に置いて、逃げてしまった。

(4) 次の各文の傍線部 1 ～ 13 の種類を、完了の助動詞は A、断定の助動詞は B、格助詞は C、接続助詞は D、形容動詞の語尾は E、ナ変動詞の語尾は F、副詞の一部は G の記号で答えよ。(各 2 点 × 13)

① その川のほとりに¹群れゐて思ひやれば、「限りなく遠くも来に²けるかな」とわび合へるに³、渡し守、「はや舟に⁴乗れ。日も暮れぬ」といふに⁵、乗りて渡らむとするに⁶、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきに⁷しもあらず。

② 据ゑなほして往に⁸ければ、上人の感涙いたづらになり⁹にけり。¹⁰

③まことにさにこそ候ひけれ。もつとも愚かに候ふ。

$\left[\begin{array}{c} \text{C} \\ \text{A} \\ \text{D} \\ \text{C} \\ \text{D} \\ \text{B} \\ \text{F} \\ \text{E} \\ \text{A} \end{array} \right]_{1 \atop 2 \atop 3 \atop 4 \atop 5 \atop 6 \atop 7 \atop 8 \atop 9 \atop 10}$

$\left[\begin{array}{c} \text{G} \\ \text{B} \\ \text{E} \end{array} \right]_{1 \atop 2 \atop 3}$

4 敬語

(1) 敬語の種類を3つ書きなさい。また、それぞれの敬語について説明した文章を後から選り記号で答えなさい。(各2点×6)

① $\left[\begin{array}{c} \text{尊敬語} \\ \text{C} \end{array} \right] \quad \text{②} \left[\begin{array}{c} \text{謙譲語} \\ \text{A} \end{array} \right] \quad \text{③} \left[\begin{array}{c} \text{丁寧語} \\ \text{B} \end{array} \right]$

- A 動作の受け手(動作を受ける人)に対して敬意を表す言葉。

B 聞き手、もしくは読者に対して敬意を表す言葉。

C 動作の主(動作をする人)に対して敬意を表す言葉。

(2) 敬語に関して、次の文章が説明する用語を答えなさい。(各2点×2)

① 動詞が、その動詞本来の意で用いられている場合を何というか。

本動詞

② 動詞が、その動詞本来の動作を表す意味を失って、助動詞のように上の動詞に敬意を添える働きをする場合を何というか。

補助動詞

(3)敬語が補助動詞として扱われる場合について説明した、次の項目の空欄を埋めなさい。(各1点×5)

① (用言) () + V

② (用言) () + (て) () + V

③ (体言) () + (に) () + 候ふ「おはすなど」

(4)それぞれの敬語の種類と、補助動詞の訳し方を答えなさい。(各1点×12)

★ (尊敬) () 語 〳

給ふ	(四段活用)
おはす	
おはします	

【訳】「(なさる)」「(お) (になる)」

★ (謙讓) () 語 〳

奉る	
申す	
聞こゆ	
参らす	
給ふ	(下二段活用)

【訳】「(お) (し) (申し上げる)」「(お) (する)」

★
(丁寧) 語 //

侍り
候ふ

【訳】「(です) ・ 「(ます) ・ 「(いただきます) 」

(5)・補助動詞として扱われる「給ふ」について説明した、次の文章の空欄を埋めなさい。(各1点×5)

補助動詞として扱われる「給ふ」には、2つの種類がある。1つは(①)の「給ふ」であり、もう1つは(②)の「給ふ」である。この2つの「給ふ」を見分けるためには、「給ふ」の(③)を確認することが必要になる。「給ふ」の(③)が(④)の場合、その「給ふ」は(①)であると判断し、一方(③)が(⑤)の場合には(②)の「給ふ」であると判断する。

¹ 尊敬語 ² 謙譲語 ³ 活用の種類 ⁴ 四段活用 ⁵ 下二段活用

(6)敬語「給ふ」について説明した、次の文章の空欄を埋めなさい。(各1点×3)

文中に敬語「給ふ」が「給へ」の形である場合には、(①)語と(②)語の可能性があるので、「給ふ」の(③)を確認することが必要になる。

¹ 尊敬 ² 謙譲 ³ 下(活用形)

(7) 謙譲語の「給ふ」の特徴について説明した、次の項目の空欄を埋めなさい。(各1点×9)

① 「(会話文)」・「(手紙文)」で使用

② 「(思ふ)」・「(覚ゆ)」・「見る」・「聞く」・「(知る)」にしか付かない。

③ 主語は「(一人称(会話主・私・I))」。

④ 訳は「(です)」・「(させていただきます)」

⑤ 敬意の方向は「(聞き手)」に対する敬意

(8) 次の表の空欄に入る内容を、下の選択肢より、訳はA～O、通常語はa～nよりそれぞれ選び書きなさい。(記号は重複可)(各2点×55)

① 尊敬語 ※太字の敬語動詞は最高敬語

敬語動詞	あそばす	います	いまそがり	おはす	おはします	ます	まします	仰す	のたまふ	のたまはす	思す	思ほす	思しめす	大殿ごもる	聞こす	聞こしめす
訳	G	H					A			L		N	O			
通常語	f	g					a	k		m	n					

敬語動詞	御覧ず	給ふ	たぶ	たまはす	しろしめす	(召す (*食す))					参る	奉る
訳	J	C			K	D	M	K	E	B	I	F
通常語	c	i			b	j	c	b	l	d	h	e

A	おっしゃる	a	言ふ
B	召しあがる	b	治む
C	お与えになる	c	見る
D	知っていらつしやる	d	食ふ・飲む
E	お呼びになる	e	乗る
F	お乗りになる	f	す
G	なさる	g	あり・居り・行く・来
H	いらつしやる	h	着る
I	お召しになる	i	与ふ
J	ご覧になる	j	知る
K	お治めになる	k	思ふ
L	お思いになる	l	呼ぶ
M	御覧になる	m	寝
N	おやすみになる	n	聞く
O	お聞きになる		

次の表の空欄に入る内容を、下の選択肢より、訳はA～J、通常語はa～gよりそれぞれ選び書きなさい。（記号は重複可）

② 謙譲語

敬語動詞	承る	聞こゆ	聞こえさす	申す	奏す	啓す	奉る	参る	参らす	賜る	参る	まうづ	まかる	まかづ	つかまつる	つかうまつる	侍り	候ふ
訳	J	G			E	F	D			B	A		C		I			
	g	f			d			b	c				a					

③ 丁寧語

敬語動詞	侍り	候ふ
訳	H	
通常語	e	

A	参上する	a	仕ふ
B	いただく	b	受く
C	退出する	c	行く・来
D	差し上げる	d	与ふ
E	天皇に申し上げる	e	あり・居り
F	中宮・東宮に申し上げる	f	言ふ
G	申し上げる	g	聞く
H	あります・おります		
I	お仕える		
J	うかがう		

(9) 敬語の本動詞に関して、次の表の1～7に入る内容を書きなさい。(各1点×7)

①覚えておくべき尊敬語

敬語動詞			敬語動詞
参る	1 お召しになる	着る	通常語
参る	2 召しあがる	食ふ・飲む	通常語
奉る	3 お乗りになる	乗る	通常語

②覚えておくべき謙譲語

敬語動詞				敬語動詞
奉る	4 差し上げる	与ふ	通常語	
(参る)	5 参上する	(行く・来)	通常語	
侍り	6 お仕える	仕ふ	通常語	
候ふ			通常語	

③覚えておくべき丁寧語

敬語動詞		敬語動詞
侍り	7 あります・おります	訳
候ふ	あり・居り	通常語

(10) 「敬意の方向」について説明した、次の項目の空欄を埋めなさい。(各1点×9)

★「誰から」↓敬語の「**場所**」確認。

・地の文⇋「**作者**」から。

・会話文⇋「**会話主**」から。

★「誰へ」↓敬語の「**種類**」確認。

・尊敬語⇋**主体** (～は・が)へ

・謙譲語⇋**客体** (～を・に)へ

・丁寧語↓敬語の「**場所**」確認。

{	地の文⇋「 読者 」へ
	会話文⇋「 聞き手 」へ

(11) 敬語について説明した、次の文章の空欄を埋めなさい。(各2点×3)

敬語が重なる場合、(①)、(②)、(③)の順番で重なる。

{	謙譲語	¹
}	尊敬語	²
}	丁寧語	³
}		

(12) 次の各文を敬語に留意して口語訳せよ。傍線のあるものは傍線部のみでよい。(各3点×8)

① ここにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ

ここにいらつしやるかぐや姫は、重い病気をなさっているのです、出ておいでになることはできないだろう

② 一の御子の女御は思し疑へり。

お疑いになった。

③ 上にも聞こしめして、渡りおはしましたり。

帝におかせられてもお聞きになって、おいでになった

④ 汚き所のもの聞こしめしたれば、御心地悪しからむものぞ。

召しあがったので、

⑤ 「とく」とそそのかし聞こゆ。

おすすめ申し上げる

⑥ 薬の壺に御文そへ、参らす

薬の壺にお手紙を添えて、差し上げる。

⑦ 女御・更衣あまたさぶらひたまひける中に、

おおぜいお仕えなさっていた

⑧夕顔と申しはべる。

夕顔と申します。

(13) 次の各文の傍線部 1 ～ 4 の「給ふ」が、尊敬なら A、謙譲なら B の記号で答えなさい。(各 2 点 × 4)

①(藤壺の宮は、亡き桐壺の更衣に)いとよう似たまへり。

[A]

②うちうちに思ひたまふるさまを、奏したまへ。

[B]
[A]

③みづからはえなむ思ひたまへ立つまじき。

[B]

(14) 次の各文の空欄 ① ～ ④ に、「給ふ」を適当な形に活用させて入れなさい。(各 2 点 × 4)

①(大納言は)え起きあがり

①

で、船底に伏し

②

給は

給へ

②六十にあまる年めづらかなる物を見

③

つる。

給へ

③おもて歌となむ思ひ

④

給ふる

(15) 次の各文を「参る」「奉る」の用法に注意して、口語訳せよ。(各3点×5)

①(源氏の君は)二、三日、内裏へも参り給はず。

二、三日、宮中へも参内なさらない

②ほかにて酒など参り、酔ひて、

よそで酒などをめしあがり(お飲みになつて)、酔つて、

③九月二十日のころ、ある人に誘はれたてまつりて、

九月二十日ごろ、ある人にお誘われ申し上げて、

④(源氏は)やつれたる狩の御衣を奉る。

人目につかない狩のお召し物をお召しになっている

⑤(帝は)御輿に奉りて、

御輿にお乗りになつて、

(16) 次の文章中の傍線部 1 ～ 9 の「敬意の方向」を、A ～ D の記号で答えなさい。(各 4 点 × 9)

A	中納言(隆家)
B	中宮(定子)
C	作者(清少納言)
D	読書

中納言参り給ひて、(中宮様に)御扇奉らせ給ふに、「隆家こそ、いみじき骨は得て侍れ。」

それを張らせて、参らせむとするに、おぼろけの紙はえ張るまじければ、求め侍るなり」と、

申し給ふ。「いかやうにかある」と、問ひきこえさせ給へば、……

